

2026.03.22.

「この人は誰なのか」

旧約 申命記18章15～18節

新約 ヨハネによる福音書7章40～52節

1. はじめに

先週の主の日、私共は「創立百周年リードオルガンコンサート」を中村証二さんを招いて開きました。宮崎地区の幾つもの教会からもたくさんの方が集いまして、全部で60名の方が出席されました。この会堂に60人も入るのかと思いましたが、大丈夫でした。最後には賛美歌 21-120番を皆で賛美し、とても良い時を持たせていただきました。月曜日はオルガン講習会・オルガンレッスンが行われました。オルガン講習会としたものですから、オルガニスト以外の方は出席できないと受け止められてしまったのかもしれませんが。教会音楽講習会とした方が良かったと反省しました。参加者は少なかったですけれど、内容は教会の賛美とは何かというような、オルガニスト以外の方にもぜひ聞いて欲しい素敵な会でした。オルガンのレッスンも足の踏み方、ストップの使い方、リードオルガンの構造まで、出席された方は目からうろこの話のオンパレードでした。そして、金曜日には私共の教会の創立はここから始まったという、鹿児島教会の九州連合長老会への加盟式に行ってきました。長崎教会から鹿児島へと福音は伝えられ、鹿児島教会から都城へと福音が伝えられ、そして100年前、正確には101年前ですが鹿児島教会と都城教会によって私共の教会が始まりました。その鹿児島教会の九州連合長老会への加盟式には、都城城南教会・長崎教会そして私共宮崎中部教会が集いました。長崎・鹿児島・都城・宮崎という伝道の歴史の中で鹿児島が九州連合長老会から抜けていたのですが、今回加盟することになり、欠けていたピースが埋まったわけです。その他、錦ヶ丘教会、戸畑教会、八幡鉄町教会、門司教会、筑紫教会、前原教会、長崎古町教会からも来ておられました。福岡県・長崎県・熊本県・宮崎県から鹿児島に集まり、さながら100年前の教会を思わせるような心が熱くされる会でした。勿論、錦江湾に浮かぶ桜島も素敵でした。オルガンコンサートも鹿児島教会の教会加盟式もとても大きな声での賛美歌でした。大変嬉しく、気持ちよくなりました。賛美というものは、私共の心を一つにする、神様が私共に与えてくださった大きな大きな恵みだと思わされました。「**主を賛美するために民は創造された**」(詩編102:19)との御言葉を思い起こしました。

2. イエス様への様々な反応

神様、イエス様を賛美する。それはとても素敵なことなのですが、この心を一つにする賛美が生まれてくるには、神様、イエス様に対しての信仰が一つでなければなりません。キリストの教会は生まれたときから、この賛美と共にありました。賛美の無い礼拝など考えられません。しかし、

この信仰が一つになるということは、聖霊なる神様の御業です。

今朝与えられている御言葉において、人々のイエス様に対しての受け止め方はバラバラでした。

「この人は、本当にあの預言者だ」という人達がおりました。この「あの預言者」というのは、どの預言者なのか。旧約にはたくさんの預言者が出てきます。一体誰のことを言っているのかといいますと、先ほどお読みしました申命記18章18節で「わたしは彼らのために、同胞の中からあなたのような預言者を立ててその口にわたしの言葉を授ける。彼はわたしが命じることをすべて彼らに告げるであろう。」と言われた預言者、神様がモーセのような預言者を立てると言われた預言者、つまりモーセのような預言者です。ユダヤ人達はこの預言者が来ることを待ち望んでいました。また、イエス様を「この人はメシアだ」と言う人がいました。救い主、キリストだと言う人まで現れたわけです。ユダヤ人達は勿論救い主、メシア、キリストが来られるのを待ち望んでいました。「あの預言者」あるいは「メシア、キリスト」でなければ、あのような奇跡も出来ないだろうし、このような力ある説教だって出来ないだろう。そう受け止める人がいました。

ところが一方で、「とんでもない。メシアであるはずがない。」と言う人達もおりました。これはどういう人達だったかと言いますと、「聖書を知っている人、聖書を読んでいる人」たちでした。具体的に言えばファリサイ派の人達や祭司長といった、当時のユダヤ今日の指導者達です。どうして彼らはイエス様を「メシアであるはずがない」と考えたのか？それはとってもシンプルな理由からでした。それは「聖書にはガリラヤからメシアが出る」とは預言されていないからです。彼らはイエス様をナザレの村に生まれた、ナザレ出身の人だと考えていました。イエス様は「ナザレ人イエス」と呼ばれていました。確かに、イエス様はナザレでお育ちになりました。人々はイエス様の父も母も兄弟も知っていました。ですから、イエス様をナザレ出身と思ったのも無理はありません。しかし、マタイやルカによる福音書によれば、イエス様はベツレヘムでお生まれになりました。しかし、彼らはそれを知りませんでした。

3. 聖書読みの聖書知らず

しかし、「聖書にはナザレからメシアが出るとは預言されていない。ベツレヘムから出ると預言されている。」だから、イエス様はメシアではない。それは確かに彼らにとっては決定的な理由ではありましたが、理由はそれだけではありませんでした。もっと根本的な理由は、イエス様が語られることが自分たちの教えてきたことと違っていたからです。律法を守り、決められた犠牲を捧げて正しい人になって救いに与る。それが彼らの最も根本的な教えでした。律法を守ることによって正しい者になって、神様のみ前に立つ。そして、救われる。そのように教えていました。しかし、イエス様の教えはそうではありませんでした。「神様の愛を信頼せよ」です。私の正しさなどというものに頼まない。頼むべきはただ神様だけだ。そのように告げるイエス様を預言者と認めることも、ましてメシア、キリストと認めることなど決して出来なかったわけです。それどころか、彼ら

はイエス様を亡き者にしようとしたのです。44.45 節にこうあります。「7:44 その中にはイエスを捕らえようと思う者もいたが、手をかける者はなかった。7:45 さて、祭司長たちやファリサイ派の人々は、下役たちが戻って来たとき、「どうして、あの男を連れて来なかったのか」と言った。」祭司長たちやファリサイ派の人々は下役をイエス様を捕らえるために遣わしたのです。ところが、下役達はイエス様を捕らえて来ませんでした。下役達は「今まで、あの人のように話した人はいません」と答えます。彼らも他の人々と同様にイエス様の話を聞き、この方は「あの預言者」なのではないか、或いはメシアなのではないか、そのように思ったのかもしれません。とても捕らえることなど出来ない。恐れ多いと感じたのかもしれません。下役達にファリサイ派の人達は言います。「お前たちまでも惑わされたのか。」自分たちは正しいのですから、イエス様を大した方だと評価するだけで、お前達は「惑わされている」と思う。更に「議員やファリサイ派の人々の中に、あの男を信じた者がいるだろうか。7:49 だが、律法を知らないこの群衆は、呪われている。」と告げました。議員にしてもファリサイ派の人にしても、当時のエリートです。教育も受けており、社会的地位もあり、人々にも尊敬されている人達です。自分たちこそ聖書を知り、神様の御心を知り、正しい者として生きている、そう思っている人達でした。それで彼らは「私達は賢い者だからイエスなんて信じない。あんな者を信じるのは、教育もない、頭も悪い奴らだ。彼らは救われぬ。呪われた者たちだ。」と言い放ったわけです。実に上から目線で、人々を馬鹿にした、侮った言い方です。それにしても「律法を知らないこの群衆は、呪われている」というのは、あまりにひどいのではないかと思います。「救われるのは私達だけだ」と言わんばかりです。

しかし、このファリサイ派の人達の心の動きは、私共にも良く分かります。この心の動きは、「自分は正しい」と思っている人に共通の心の動きだからです。それは年齢も性別も時代も文化も超えて普遍的なものではないかと思えます。これが「罪」であり、「傲慢」というものです。信仰であれ、政治的な立場であれ、思想・信条のことであれ、「自分が正しい」あるいは「それが当たり前のこと」と思っていることに対して、今まで自分と同じだと思っていた人が自分の意見と違ったり、或いは自分の立場と違ったようになると「惑わされた」、「間違っただけを受けた」「目を覚ませ」「お前は何も知らないんだ」というように思う。それが私共です。これは宗教に限りません。政治も思想も同じです。そんなに大きなことではなくても、日常の生活習慣のことであってもそうなります。自分が正しい、当たり前と思うことに対して、心の中で起きる反応です。ほとんど例外はありません。そして、私共もそのような心の動きから無縁ではありません。しかし、ここで問いが生まれます。信仰において「これが正しい」という確信がなければ、信仰は成り立たないでしょう。とすれば、私共はみんなファリサイ派の人達のように、自分の信仰と違う人達に対して、このような上から目線で侮るような心の動きから逃れられないのでしょうか？これは重大な問題です。もしそうであるならば、私共はファリサイ派の人達と同じように、「聖書読みの聖書知らず」になってしまいます。聖書の言葉は知っているけれど、神様の御心から、イエス様の愛から遠く離れたところで生

きていることになってしまいます。

4. 正しいお方はイエス様だけ

私共が信仰に生きるということは、「自分の正しさ」に生きるということではありません。正しいのは神様だけ、イエス様だけ、そのことをしっかり心に刻んで生きるということです。では、私はどうなのか。私はただの罪人でしかありません。そこに立ち尽くすということです。その愚かで、罪人に過ぎない私を愛してくださり、独り子さえも惜しまずに与えてくださった神様。その神様に感謝し、その神様・イエス様を賛美しつ、喜んで神様に従って歩む。それが私共の信仰の歩みです。

「自分は正しい」という所に立つとき、人は争いから逃れることが出来ません。何故なら、全ての人と同じように考えるようになど決してならないからです。正しい者と別の正しい者が互いに自らの正しさを主張する。そこに争いが生じます。争いは正しい者と正しくない者がぶつかって生じるものではありません。正しい者と正しい者がぶつかって生じるのです。そして、イエス様は十字架に架けられてしまいました。牧師として 39 年生きて、私はなおこの「私の正しさ」から自由になれないでいます。この「私の正しさ」に固執する罪というものは、本当に根深いものです。しかし、この年になってこの「私の正しさ」から自由になる道を私もほんの少し心得てきました。それは、賛美であり、祈りです。私共は祈っているとき、自らの罪を神様の御前に素直に認めることが出来ます。人と人との関わりの中で、私共は「私の正しさ」を手放すことが出来ません。自らの過ちを中々それを認められない。ところが、神様のみ前に立って祈るとき、私共は素直に自らの至らなさ、わがままさ、愚かさ、身勝手さを認めることが出来ます。それは、「私の正しさ」から解き放たれているということです。そして、もう一つ。神様をイエス様を賛美するとき、「自分の正しさ」なんてどうでも良いのであって、ただ神様だけが真実であり、イエス様の愛だけが私を生かしている。このことを「清々しく認める」ことが出来ます。パウロがエフェソの信徒への手紙 5:19 で「詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。」と告げているのはこういうことです。本当に、賛美は不思議です。賛美は私共の心を神様に向けられます。「私の正しさ」など気にもかけません。ただの罪人として、神様の御前に立って、ただ神様の愛と力と真実とを賛美する。賛美は一人でも良いのですけれど、それがたくさんの人と一緒にになると、更に神様の恵みと真実と愛の中に生かされている喜びの中に身を置くことが出来ます。まさに、賛美は御国の祝福の先取りだと思わされます。

5. ニコデモ

さて、ここにニコデモという人が出てきます。この人はヨハネによる福音書において、三回出てきます。一回目は3章でニコデモがイエス様を夜に訪ねていった時。二回目は今朝与えられている

御言葉において。そして、三回目はイエス様が十字架に架けられて亡くなった後、イエス様のご遺体を墓に収めるときです。

3章でイエス様を夜に訪ねたニコデモは、ファリサイ派に属する議員であったと記されています。彼はイエス様を「ラビ（先生）」と呼び、「神様が共におられるのでなければ、あなたのようなしるしを行うことは出来ません。」とまでイエス様に告げています。彼はイエス様を明確にメシア、キリストと信じていたわけではありませんけれど、イエス様を特別な方として認めていました。しかし、彼がイエス様の許に訪ねていったのは夜でした。人目をはばかったのでしょうか。彼はファリサイ派の人間であり、議員でもありましたから、社会的な地位も立場もあった。そして、彼の周りの人達は誰もイエス様を認めようとはしていない。しかし、イエス様を無視することも出来ない。そういう中で、彼の心は揺らいでいたでしょう。イエス様は彼の心を見抜いて「人は新たに生まれなければ、神の国を見ることは出来ない」（3:3）と告げられました。それは、今までの生き方、自分の正しさというものから抜け出して、神様によって新しくしていただかなければ救われない。自分の正しさに囚われていてはダメだと言われたのですけれど、この時彼にはそれが出来ませんでした。

そして、今朝与えられている御言葉において、ファリサイ派の人達が下役を使ってイエス様を捕らえようとしていた時、ニコデモは「我々の律法によれば、まず本人から事情を聞き、何をしたかを確かめたうえでなければ、判決を下してはならないことになっているではないか。」（7:51）と言って、イエス様を捕らえようとするのを止めようとなりました。彼がこの時イエス様をメシアとして信じていたのかは分かりません。しかし、イエス様を訪ねていったときよりも、ベトザタの池での病人の癒し、5千人の給食などの奇跡の話聞き、またイエス様の話も聞き、以前よりはイエス様に対しての信頼が増していったとは言えるでしょう。

そして最後に 19 章、イエス様が十字架の上で死なれて、その遺体を墓に葬るとき、同じ議員であったアリマタヤのヨセフと共にイエス様の遺体を墓に葬りました。これは周りの人達に対しての「私はイエス様を信じます」という無言の表明でした。十字架に架けられた人の遺体を引き取り、葬るのは身内の者がすることです。いや、身内の者さえも見捨てることも少なくありません。しかし、この時ニコデモは私はイエス様の身内の者で見られても良い。その覚悟がこの時ニコデモに与えられました。

このニコデモの変化は、私共の変化でもあります。最初から明確な信仰を持っている人などいません。最初はぼんやりと「イエス様は凄い方だな」くらいの思いから始まります。その段階では、自分の信仰をはっきり表明することなど出来ません。しかし、イエス様のことが気になり、少しずつ変えられていき、誰の前でもはっきりと自分の信仰を表明できるまでになっていく。ニコデモも他のファリサイ派の人達と同じように「私の正しさ」によって、それを頼りに生きていた人でした。しかし、「私の正しさ」に立つ以上、イエス様を捕らえて十字架に架けた者の側に立つことになる。それは出来ない。この時、すではニコデモは「私の正しさ」ではない、イエス・キリストというお

方の愛、真実というものに信頼するという歩みが始まっていたのでしょう。彼はイエス様の業や言葉に現れた神様のみ心というものに、心が捉えられ始めていました。そして、それが遂にイエス様の十字架を見るに及んで、「自分の正しさ」は砕け散り、ただ神様の愛と真実に捕らえられてしまったのです。

6. 時がある

全てには時があります。神様が定められた時です。イエス様がこの時下役達に捕らえられなかった本当の理由は、「まだ時が来ていなかった」からです。ニコデモが「私の正しさ」から解き放たれていくのにも時があった。全ては少しずつ、少しずつです。私共はこの神様の時の中で生かされています。正しいお方は神様だけ、イエス様だけです。私共は自分の予定、自分の見通し、自分の人生設計の中で、この時・あの時、どうしてこうならないのか？ どうしいあうなってしまったのか？ そう思うこともあるでしょう。でも、神様の時がある。そして、一つ一つの出来事が、神様の時の中で、一番良いときに、一番良いようになっていった。そのことをはっきり知るときが来ます。私共が生きている間に、ちょっとそのことが分かることもあるかもしれません。しかし、多くはボールに包まれて、ぼんやりとしか分からないでしょう。でも、はっきり分かる 때가来ます。御国においてです。

その時私共は何をするでしょう。賛美するんです。神様をイエス様を聖霊なる神様を心から賛美する。私はその日を心から待ち望んでいます。そして、神様はその日を前もって少し味合わせようとして、私共に賛美という恵みを与えてくださいました。私共が心を一つにして賛美を捧げるとき、私共は心を高く上げられて御国におられる神様の御前に集うことになります。まことにありがたいことです。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

全き愛と真実はあなた様と共にあります。正しいお方はあなた様だけです。私共はあなた様を差し置いて、自分が正しい者であるかのような思い違いをしばしばしてしまいます。まことに愚かで、罪深い者です。そのような私共をなおも愛してくださり、あなた様の子としていただき、永遠の命に生きる者にしてくださいました。ありがとうございます。私共の出会い出来事は、私共が知り尽くすことの出来ないあなた様の御支配の中で、あなた様の御心にある時が満ちてのことです。どうか全てのことに於いて、あなた様に感謝し、賛美をもって答えていくことが出来ますように。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン